

## 分子科学——自然の豊かさの源を探る——

大峯 巖  
名古屋大学理事・副総長

32年前、今の東門あたりにあった牧場のような横に長い木戸を押し開けて、不思議な国に入るような感じがした。いろいろな植物が茂っており、その中にレンガ張りの新しい建物（実験棟）が建っていた。そして、諸熊先生に会った。諸熊先生は今も元気に活躍されているが、その頃はさらにまばゆいばかりのエネルギーに溢れていた。そして、部屋の奥のタバコの煙のなかに加藤重樹君がいた。研究の合間によくした夜中1時から外の外灯の下での皆とのキャッチボール——あの頃の分子研は、創設期の特別な若い活気のある、空気が満ちていた。

米国での博士課程の学生を終え、MITでポスドクをしていた時に、新しくできた分子科学研究所で特定領域奨励研究員（現在のIMSフェロー）に来ないかという知らせがあり、豊橋から深い緑のあふれる名鉄の沿線を見ながら、岡崎にやって来た。それからの楽しいと同時に苦しかったポスドクの3年間、その後MITと慶応大学を経て、再び分子研に戻り自由な助教授を過ごした11年間と、計14年間分子研にお世話になった。直線的でわがままな、先の見えない不安な、エネルギーの溢れる若い時に、独立した研究者として、自由と無限とも言える贅沢な時間を与えてもらった。それから名古屋大学に移り、14年、分子研は何か遙か昔のような懐かしい思い出の場所であり、同時に自分なりの学問の方向を作ることができた大事な場所である。

分子研では、当然「自分たちの専門とする学問が確固たる存在である」と思っていた。しかし大学では、自分の立っている学問を見直すことが迫られる。いかに人が「考える力」によって、文学、法学、経済、工学、農学、医学を初めとする、多様な学問を作ってきたか、その中にある理学の意味、そして化学という学問の成り立っている「もと」を見つめざるを得ない。さらに、基礎科目、特に初年度生に化学の最も基礎となる考え方を教えることの難しさ、自分のもつ学問の浅さに啞然とする日々であった。しかし、大勢の学生の燃え立つよ

うな、溢れ返る若い力、また「無駄」、「余裕」のある心地よさがあつた。初め自分の研究室と教室の間だけで、この大学の心地の良さを満喫していた。しかし、7年前のあるきっかけから、評議員、学部長・研究科長、理事として大学運営に関わらざるを得なくなった。

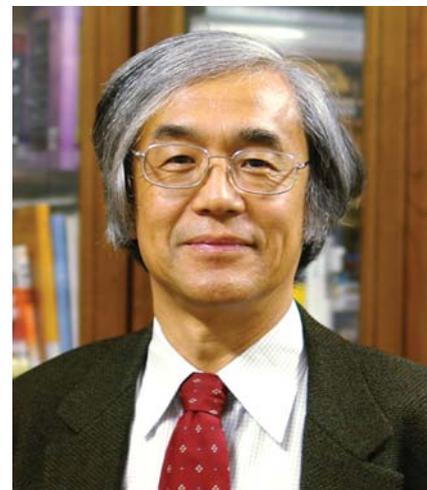
大学院重点化以後、国立大学の姿が大きく変化してきている。特に法人化の前後から、大学が浮き足立って来ており、その根底が揺らいでいる。喩えれば、法人化によって大学という船が、岸壁を離れ未知の大海原への旅を始めたが、その不安から、岸に向かって陸への思いを叫んでいるような状態といえよう。

大きな海原にあつては羅針盤が必要である。羅針盤とは大切な方向、ものの根幹を示すものであり、大学にとっては、どう考えても、それは学問以外にあり得ないと思う。学問とは、「ものごと」の芯を極めようとする行為であり、同時に、我々を取巻く「もの」の多様さ、豊かさへの共感を得ていく過程である。それは我々の原点を示すものであり、芯であるがゆえに革新的であり社会に大きな影響を与えるものである。

分子科学は、原子、分子を司るシンプルな原理から、いかに多様なものが生まれ変化していくのかを知るための科学、即ち、自然の豊かさの源を探り、我々の存在の根源を探る学問である。

分子研が創られて30数年、次の飛躍に向けて大きなステップを踏むべきときにきていると思われる。その為には、分子科学が宇宙、地球、生命、さらに地球環境、医学、工学など多くの学問と共鳴しながら、真に新しいフィールドを作り、またそのことにより分子科学自身が深まり、分子科学という学問の豊かさや広がりが多くの学問の源となっていく、そのようなサイクルを描いていくことが求められている。

多くの国立大学や研究機関が財政的心配から国の政策を先取りしようと躍起になっているが、今こそ、その次元を脱却し、本質的な「学」のあり方についても



う一度見直すべきときであると思われる。「学」は、学を志す一人一人が、あるものを不思議と思い、それを知りたいと強く希求し、無限とも思われる試みと失敗の繰り返し、そして僥倖によって生まれてくる、一人一人の長い道のりである。また「学」はそれ自身が乗り越えられることを内包しており、先人、我々、そして継ぎ行く人々の連綿たる行為により作りだされていく。「学」をする者の一歩一歩の歩みを支えようとする大学・研究所の意志と、社会の深い共鳴と信頼が、その大切な支えである。

分子科学研究所が、学問に対する熱情と柔軟性と強い意志によって、真の学問の府としてさらに大きく発展して行くことを期待している。

### おおみね・いわお

東京大学工学部数理工学科1968卒、  
米国ハーバード化学物理博士課程修了1976 (Ph.D取得、1977)、  
パリ大学第7 研究員 (1974-1975)、  
MIT化学科博士研究員 (1976-1977)、  
分子科学研究所特定領域奨励研究員 (1977-1980)、  
MIT物理学科研究員 (1980-1981)、  
慶応義塾大学助手 (1981-1982)、  
分子科学研究所助教授 (1982-1994)、  
名古屋大学理学部教授、理学研究科教授 (1994-現在)、  
名古屋大学理学研究科評議員 (2002-現在)、  
名古屋大学研究科長・理学部長 (2003-2005)、  
名古屋大学理事、副総長 (総務担当：2006-2007、財務担当：2007-現在、CIO：2006-現在)

### 専門分野

理論化学 水の多様性の発現機構、生体分子反応、分子の励起状態ダイナミクス、ゲルの相転移の研究